
本当のキモチ

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当のキモチ

【Zコード】

N6271D

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

自分の本当の気持ちに気付くとある少年の話

(前書き)

これはノクターンノベルズで自分が投稿した俺は怪獣に恋をするを設定を多少変えて通常版に手直ししたものです。

T T T T T

その怪獣は大きな足音を立てて迫ってきた。

太一！またケーブル持ってきていたでしょ！？」

「なんだよ？」
「別に良いじゃん」
お前たぶて俺のCD持ってきて

「そういう問題じゃなくて……」

「アレ、そこにあるから勝手に取れ」と

と太一は頭をグリグリされた。

「痛い、痛い。この暴力フス！！！ だいたいお前も人のこと言え
ねえ」 だろ？ はあ、あこなんんじや 一生彼氏なんてできねーな」

「お世話なふる語」

「たく生蠅坂なんだから

んいるんだからね

「わかった。そりゃあで話うのなら勝負しまくわよ？」　じつちが先に付

「俺、インテンドウリーがいい」

にね」

と余裕をみて部屋に戻つていった。
あまがせえり

怪獣とは天瀬恵梨。隣に住んでる俺、宮本太一の一つ上の幼なじみである。すぐに手が出る暴力女、こいつのせいで何回家を修理しただろう？　俺の中では悪魔である。

しかしあの田

「ねえ？ 太一？ いいこと教えてあげよっか？」
とゲームをしている俺に恵梨が言つてきた。

「なに？」

「そんなに知りたい？」

「ともつたいぶるよつに言つて恵梨に

「だから何だよ！－！」

とイライラする俺。

「私、彼氏で来たの」

（え……）

その瞬間俺は頭が真っ白になつた。

思わずコントローラー落としてしまつた。

「信じられないからつてそこまで驚かなくともいいでしょ！ いい
でしょ？ 羨ましいでしょ？ ということで勝負は私の勝ち。ちゃ
んとマイポッドかつ

「恵梨！！ 今すぐ別れてくれ！！ そいつと

「え？ なんでよ？」

と当たり前のように聞き返した。

「いいからそいつと別れろつつつてんだる！－！」

（俺……何言つてんだるう……）

「なによ！－ 結果報告しにきただけなのに。そんなに勝負に負け
たの悔しいの？」

と恵梨は俺の部屋を出て行つた。
自分でもわけがわからなかつた。
いつもなら

「神様？ 明日で世界が終わりますんよつに

「どういう意味よ？」

「まんまだよ。それぐらいありえないってんの。もしかしてボロッ
てムリヤリ付き合わせたんじゃねえのか？」
とか言ってからかつて終わりだと思つていた。

あの日から恵梨のことばかり考えるよつになつた

「太一君？一緒にご飯食べよう？」

とクラスのマドンナ的な存在で俺が想いを寄せる京子に誘われた。今まででは飛び上がるほど嬉しかったはずなのにわほど嬉しいとは思わなくなつてきた。

「そうそう太一君に弁当作つてきたんだ。食べる？」

「うん……」

と食べる俺。

「どう？」

「おじしいよ」

「ホント？ よかつたあー。これね？ ちょっと焦がしちやつて…

…

（恵梨はこんなにうまくできねえな。炭素の塊になるのがオチだ。彼氏にも弁当作つてんのかな？ 最近朝早く起きてるもんなんつてなんでここの恵梨が出て来るんだよ！…）

帰り道

俺が正門を出た先に恵梨と彼氏と思われる人が楽しそうに話している。

あんな笑顔は今まで見たことなかつた。俺は負けた気がした……（なんだよ……！！！ この敗北感……）

俺はとつさに走り出した

「あー 太一」

と恵梨が声をかけても無視して走り抜けた。

(俺なんで逃げてんだ? ただ彼氏と話してただけだ? ただそれだけなのに……)

なんだよ……」の胸の痛みは……俺、もしかして恵梨のことが

! ! ! ?)

と俺は全力疾走で考えていた。

「ちょっと何よ……せつかく声をかけたのに」

「アレが幼なじみくん?」

「うん」

「最近おかしこのよ。機嫌悪いといふか、話かけてもひくに返事もしないし。まだこの間のことと根に持つてるのかな? たく姑かつての」

「ねえ? 変なこと聞くけど? 恵梨ちゃんって幼なじみくんの事好きなの?」

「なんですよ……」

「だつて話題はだいたい幼なじみくんのことだし」

「それは、太一が私に気に障る」とすらからよ。いわば愚痴よ……。

愚痴

「それにしては幼なじみくんのこと話す時が一番イキイキしているように見えるんだけど? 気のせいかな?」

「気のせいよ……もう」

「なあ~恵梨ちゃん? こんなのもついこんな関係やめようつぶと彼氏が切り出した

「なんだよ? 私豊くんの事大好きだよ」

「嘘は聞きたくない。自分に正直になりな

「どういう意味?」

「わかつてのはずだよ? 君の本当の”キモチ”」

そう言い残して彼氏は去つていった

俺は部屋に閉じこもつた

(俺どうしたんだ? 最近? 考えることは全て恵梨のこと……す
ぐ手が出る暴力女だぞ! !)

「いつまでいじけてのよ! ! それでもあんた男なの?」

と恵梨は俺の部屋に乗り込んできた

「そんなんじゃないんだ……」

「ならなんで?」

「なんでもいいだろ! ! !」

「やつぱり負けたこと根に持つてんじゃない」

「だからそんなんじゃねえよ! ! !」

と俺は立ち上がり恵梨を抱きしめてこう言つた。

「恵梨のことが好きなんだよ! ! !」

「えつ! ! !」

恵梨は驚いてしばらく硬直していた
そんな彼女から離れた。

「恵梨が彼氏ができるたつて聞いたとき頭が真っ白になつて。その時
に好きなんだつて気付いて。でも付き合い始めたから。今更自分の
気持ちを言うわけにも行かず……だからイライラして恵梨に変な態
度とつて迷惑かけた。ごめんなさい」

「たくホントにバカなんだから」

「なんだと! ! ! この暴力ブス! ! !」

「私ね、フラれちゃったの」

「そりや暴力ブスだから」

「何ですつて! ! !」

「べつだ?」

とあつかんべーをする俺に怒りを堪えて

「彼氏に言われたんだ。自分に正直になれって。私は太一が好き!
！大好き! ! ! 好きで好きでたまらないの! ! !」

といつて俺にキスをしてくれた。それはとてもやわらかくとろける

うだつた。

そして俺たちは見つめあつた。

「すつ
げーかわいい」

「ば〜か、今頃気づいたか」

「何、調子乗つてんだよ！！」

そして俺たちはまた口付けをした

ビビビビビビ……

その怪獣は大きな足音を立てて迫ってきた。

「太ー！！！今度はジーンズ持つていったでしょ！？」

「なんだよ？別に良いじゃん男女兼用なんだし。それに洗濯してあるし。」

「そういう問題じゃなくて！…」

「いまゲームしてるから、そこにあるから勝手に取つていつて」「それが、服を勝手に持ち出したやつのいう言葉か！…」

と俺は頭をグリグリされた。

怪獣とは天瀬恵梨。おれ、宮本太一の隣に住んでる一つ上の幼なじみである。すぐに手が出る暴力女、こいつのせいで何回家を修理しちだらう？俺の中では悪魔である。でも本当は最高の女性……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6271d/>

本当のキモチ

2010年10月29日13時54分発行